



戦に備え無銘の墓

教育学部長
IR・戦略統合センター長
教育学科 教授

曾野 洋

紀伊徳川家菩提寺である長保寺（和歌山県下津町）を昨春、歴史学を研究する仲間と共に訪問する機会があった。小雨の降る中で私達を快く出迎えてくれたのは、住職の瑞樹正哲さんだ。

一条天皇の勅願により1000年に創建された長保寺は、大門・本堂・多宝塔がすべて国宝である。瑞樹さんは「これら3点がそろって国宝の寺は、法隆寺と長保寺だけ」と教えてくれた。本堂の背後に広がる山の斜面に、約1万坪の広大な紀伊徳川家廟が造営されており、私たちは初代紀州藩主徳川頼宣（1602～71）の墓へ歩を進めた。

しばらく山を登ると、頼宣廟に着いた。驚いたのは初

代藩主の墓が無銘であることだ。一体なぜか。文字を刻まないことが、文字よりも大事なメッセージを伝えるという確信があったのかもしれない。そう推測したのは、瑞樹さんの次の説明が印象に残ったからである。「周囲を山に囲まれた要害の長保寺を、頼宣は戦が起こった時の陣地として利用したいと考えた。その際、荒らされないよう用心のため墓標に字を書かせなかった」と。

上記の説の通りだとしたら、初代藩主は自分の死後、いつ戦になっても適切な対応ができるよう準備を怠るな、という家臣たちへの強いメッセージを無銘の墓に託したとも想像できる。1666年に長保寺を紀伊徳川家菩提寺に定めた徳川頼宣。大坂夏の陣や島原の乱などを直視してきた頼宣らしい、次なる戦に備えた未来志向を、私は長保寺を訪ねて実感できた。

将来起こり得る悪いシナリオ（戦争）を想定したうえで、菩提寺選定や墓のデザインを決めたと思われる頼宣の発想法が、現代人に示唆することは何か。これは学生諸君と共に吟味したい課題の一つである。



豆柴のゴマに気付かされたこと

学生支援センター副センター長
人文社会学部
日本学科 教授

源 健一郎

16年間かわいがってきた豆柴のゴマが死んだ。冷たくなっていくゴマのからだを撫でながら、はたと気付かされたことがある。私がゴマを支えていたのではなく、ゴマに私は支えられていたのかもしれない。勝手な飼い主だった私を、ゴマはずっと信じ、好きでいてくれたのだから。また、こんなことも思った。ゴマは、私に「老いること」「死ぬこと」を学ばせてくれたのだと。ペットはたいの場合、飼い主より先に死ぬものだ。それを単に悲しむだけでなく、その命の意味を、私たち人間は受け止めるべきだろう。

「一切衆生悉有仏性」（涅槃経）という言葉がある。すべて生あるものには仏となる可能性を有しているということだ。人

間は常に、傲慢にふるまいがちだ。でも、犬やネコといった人間よりも弱い存在（ペット）と出会い、生活を共にし、その最期まで責任を持って寄り添うこと、そうした経験を通じて、人間（飼い主）は自分自身の命や、周りにひろがる縁について、謙虚に向き合い、考える機会を得ることができる。飼い主ヅラをしていた私よりも、ゴマの方がよほど「仏性」に恵まれていたのだ。

ただ、私にもまだ救いがある。ゴマの命をこのように捉え直せたのは、私が仏教の思想に触れていたからだろう。IBUの学生のみなさんは、1年次の「仏教」の授業で「開経偈」を唱えてきたはずだ。たくさんの生物の中で、人間として生まれること自体が奇跡のような確率であり、人間の中でも仏教に触れるのはさらに奇跡のような縁であると述べる内容である。仏教は、人間がよりよく生かされてあるための知恵である。それは難解な経文の中にだけ説かれるものではない。私たちのふだんの暮らしの中に、そのヒントは潜んでいる。毎年、学生のみなさんと「仏教」の授業に取り組みながら、私自身も、そうしたヒントを見逃さない感性を養い続けたいと思っている。

野中寺について

野中寺住職

野口 眞戒先生



私は、羽曳野市野々上にあります野中寺の住職で野口眞戒と申します。

野中寺は、別名を「中の太子」と申しまして、聖徳太子様ゆかりの寺院です。聖徳太子様のお墓がある叡福寺（太子町）を「上の太子」、蘇我馬子と物部守屋の合戦地の跡に建つ大聖勝軍寺（八尾市）を「下の太子」と呼びますが、野中寺は「上の太子」と「下の太子」の丁度真ん中に位置することから「中の太子」と呼ばれています。かつて、この三ヶ寺は、河内三太子と呼ばれ、聖徳太子信仰の中心地の一つでした。

野中寺の創建は、今から約1400年ほど前の飛鳥時代で、聖徳太子様が蘇我馬子の助力を得て建立したと伝えられています。創建当初は法隆寺式の伽藍でしたが、南北朝時代の戦乱により全焼します。しかし、その礎石は現存しており、昭和19年に「野中寺旧伽藍跡」として国の史跡指定を受けています。また、昭和60年には塔跡の発掘調査が行われ、その出土瓦から、650年には伽藍が完成していたことが判明しました。創建当初の野中寺は、難波の港から飛鳥の都に通じる竹内街道に面し、街道を往来する内外の使臣たちにその威容を誇っていたと思われます。

南北朝の戦乱で焼失して以降の中世の野中寺については、よくわかりませんが、江戸時代のはじめ、寛文年間(1669年前後)に律宗の高僧慈忍猛律師によって、戒律修行の僧侶の学校として復興されます。延享3年(1746年)には、江戸幕府より「一派律宗惣本山如法僧坊輪番所」の認可を受け、律宗野中寺一派の修行道場・学問所であることが公認されます。



現在の野中寺には、戒律道場の遺構である比丘寮、沙弥寮、勸学院、食堂が現存し、大阪府指定文化財として保存されています。いずれも簡素な造りですが、律宗寺院の遺構として貴重なものです。

また、野中寺には、国の重要文化財に指定されている弥勒菩薩半跏像が所蔵されています。30cmそこそこの小振りな像ですが、白鳳期(飛鳥時代後期)を代表する仏像と言われています。この像は、毎月18日の午前9時半から午後4時まで開帳され、拝観できます。

なお、毎年、四天王寺大学様の仏教体験の授業の一環として、野中寺で座禅会が行われています。矢野野先生方のご引率で、桃尾先生のご指導により、本格的な座禅を体験していただいています。ご興味のある方は、先生方にお問い合わせ下さい。

夏学期の仏教Iでは6月25日に「大学周辺の歴史文化―野中寺を中心に」と題する講話を行ないました。講話では、四天王寺大学のすぐ近くにあり、本学とも聖徳太子のつながりでご縁のある野中寺のご住職・野口眞戒先生から野中寺についてのご講話をいただきました。上掲の文章はその講話をおまとめいただいたものです。

本学のある羽曳野・藤井寺一带は、石川や大和川の水資源が豊かで、大陸に開かれた難波の港に近いといった好条件に恵まれた地域でした。古くから大陸の影響を受けた文化が開け、約130基にもおよぶ古市古墳群からわかるように、古代の王権の拠点でもありました。御陵前のバス停のすぐ近くには、バスからは住宅が迫って全貌が見えませんが、全長240メートル余りもある仲哀天皇陵古墳があり、水を灌えた濠に常緑の美しい姿を映しています。

また聖徳太子の時代には難波の港から飛鳥の都に通じる幹線道路が整備されました。野中寺の南側(野々上バス停の南寄り、燈籠のある所)を東西にはする竹内街道がそれで、現在も古市に向かう軽里あたりに旧街道らしい風情を残しています。

古市駅から大学方面へ坂道を上りきった所には、かつて渡来系氏族の津氏の氏寺である善正寺がありました。境内は南北約100メートル・東西約55メートルもあり、東西に塔のある薬師寺式伽藍の立派な寺院でした。そのすぐ西側、「新しい道本部」の石柱の立つ奥には、聖徳太子の弟である来目皇子のお墓もあります。

このように、大学の周辺は長い歴史と豊かな文化とに恵まれた地域です。無意識にみていたありふれた景色も、そこに積み重なった年月と人の営みに思いを致すことにより、意味のあるものに見えてくると思います。学生の皆さんも忙しい毎日かとは思いますが、在学中にぜひ少し時間を作って、大学周辺の寺院、街道、古墳を訪れてみられることをお勧めします。

(矢野野 隆男)

ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教広報誌「ウパーヤ」は第5号から学生編集員を募集して紙面作りに参加してもらっています。

これまで第4面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材・記事の執筆、およびその取材見学の様子を本学ホームページで紹介してもらうなどの活動をしてもらってきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしてもらったこともあります。

学科専攻にかかわらず、仏教、寺院、仏像、歴史などに興味の

ある方、また取材や記事の執筆に関心のある方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声掛けください。ご連絡をお待ちしています。



(矢野野 隆男)

第7回 卒業生インタビュー

話し手：坂田 学（さかた まなぶ） 大阪市内ホテル勤務

平成21年3月 言語文化学科英語英米文化専攻（現在の国際キャリア学科）卒業生

聞き手：桃尾 幸順（仏教Ⅰ・Ⅱ 講師・日本学科講師・本欄編集）

礼拝について

大学に入って一番印象的だったのが、大講堂に自分と年代の学生がたくさん集まって、誰もしゃべらない厳肅な雰囲気の中で礼拝が執り行われていたことです。それまで仏教というのは年配の方が参加するものだと思っていたので、礼拝の雰囲気には圧倒されました。学生のころはあまりその重要性に気付かなかったのですが、就職してから心を無にすることの大切さがよくわかりました。社会人になって仕事に追われていると、なかなか静かで落ち着いた時間を作り出すことは難しいですし、休みの日であっても、仕事やその他の事についていろいろ考えてしまうのですが、そういう時に大学での瞑想を思い出して、目を瞑って心を無にすると、とても気分が楽になります。もし大学で瞑想に出会っていなかったら、心を無にすることの重要性はわからなかったです。瞑想は心を支えるために今も役に立っています。

写経は熱心に取り組んで、2冊目まで書いていました。大学では中国語も学んでいたのですが、般若心経は現代中国語でも、日本語でもなく意味を理解することが出来ませんでした。しかしわからないからこそ何も考えず、無心になって写経に取り組めたのだと思います。幼い頃に祖父が亡くなった時に家族で唱えていたことがあって、般若心経は覚えていたのですね。だから写経に集中できたのかもしれない。

学園訓について

「聖徳太子概説」（現在の「仏教概説」）の授業では聖徳太子について学びました。聖徳太子に対しては和を重んじる優しい人だというイメージがあります。社会は厳しいけれど聖徳太子は優しい。聖徳太子の教えの中でも、特に「和」は大切だと思います。今まで色々な場所で仕事をしましたが、和を乱す人はどの職場にもいました。和を重んじることは簡単なことではありません。今の仕事はホテルのフロントですが、この仕事は好きだからできる仕事で、人の入れ替わりが激しいです。だからこそ和が大切です。和を重んじるとうまくいくことも、自分中心で考えると必ず衝突が起こります。職場や社会には様々な決まりがありますが、その多くは道徳心と和を重視する心があれば必要ないものです。和を重視する心がないからつまらない決まりを作る必要が出てきます。ホテルの仕事でもフロント仲間との和が乱れるとお客様にも気付かれます。仕事の中でお客様の特別な要望を聞いてあげることもありますが、従業員同士の和が乱れていけば、そういう時に従業員同士の考えの不一致が生まれ、お客様の要望にうまくお応えできなくなります。だからこそ和は大切なのです。

礼儀に関してはホテルではとくに重要で、従業員向けのマナーの講習

会も行われています。ホテルの仕事の中でも、プライダルの部署は1年近くの間、宴会係は1~2時間の間同じお客様と関わる事が出来ます。しかしフロント系の職員がお客様と関われるのはせいぜい5分程度です。ですから第一印象が大切です。後で挽回することができないので、迅速に動いた上、礼儀正しくしなければなりません。

恩については、新人のころ、仕事を教えてもらうことは恩であると思います。教えてくれる人は、自分の仕事に加えて、新人教育を行ってくれています。それを恩と受け取ることが、自分がベテランになった時に、新人に教えるという形の恩返しにつながります。人の入れ替わりが激しい職場なので、多くの新人に仕事を教えることが面倒になり、仕事をきちんと教えない人がいます。そうすると余計に仕事に定着しなくなります。だから教えてもらった恩を返すという意識が大事になるのです。その時の感情に左右されると恩を返すこともできなくなるので、心を無にすることも大切になってきます。



在学生へのメッセージ

私は大学の頃はどうかと言われると、とても楽しかったという印象ばかりがあります。そう思えるようになったのは、卒業してから何年もたってからのことです。社会の中で理不尽なことなどに直面する中で、学生時代がいかに良かったか気付くようになりました。楽しかったと思えるのは大学時代にたくさんの人と出会って、一緒に遊んで、共に学んで、大好きな英語と中国語を学ぶことができたからです。それらを活かして私は海外に旅行することができましたし、今のホテルの仕事に就くこともできました。それがあって大学というのは私にとって特別な場所でしたし、19歳から22歳までは特別な時代でした。皆さんにも大学時代を良い思い出として振り返ることができるような学生時代を歩んでほしいと思います。

また先生方や仲間との縁も大切です。学生時代に先生を通じて、IBUのOBの方からホテルのアルバイトを紹介してもらったり、共に中国語を学んだ日本語日本文化専攻（現在の日本学科）の先輩からユースホステルの仕事を紹介してもらったりしたことが、ホテルの仕事への興味につながり、現在の仕事につながっています。皆さんにも是非縁のつながりを大切にしていきたいと思っています。

平成27年度 夏学期「仏教Ⅰ」 講話題目

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 4月9日 | 桃尾 幸順先生「礼拝説明／授戒説明」 | 5月28日 | 兼子 恵順先生「四弘誓願—利他の誓いと実践—」 |
| 4月16日 | 学長 西岡祖秀先生「建学の精神—「こころえ手帳」に寄せて」 | 6月4日 | 井川 好二先生（国際キャリア学科）「世界の発見、自分の発見—Discover the World & Discover Yourself? —」 |
| 4月23日 | 桃尾 幸順先生「瞑想—心を整える楽しみ—」 | 6月11日 | 原 祐子先生「仏教聖歌—心に響く歌—」 |
| 4月30日 | 浦野 雅人先生（薬物乱用防止指導員）「薬物乱用の防止について」 | 6月18日 | 藤谷 厚生先生「懺悔文—日々の行いを正し、省みる心—」 |
| 5月7日 | 成田 由岐子先生（弁護士）「学生生活とリスク社会について—犯罪に巻き込まれない、起こさないために—」 | 6月25日 | 野口 真戒先生（野中寺住職）・矢羽野 隆男先生「大学周辺の歴史文化—野中寺を中心に—」 |
| 5月14日 | 拝田 清先生&学生（甲斐勇太郎さん、虎伏史帆莉さん、鬼頭貴之さん）「海外留学・語学研修の意義—サンラファエル、ニューヨーク、そして浙江省—」 | 7月2日 | 上續 宏道先生「開経偈—出会い（縁）の不思議—」 |
| 5月21日 | 矢羽野 隆男先生「学園訓—「和」とはどういうことか—」 | 7月9日 | 南谷 美保先生「仏様を知ろう—仏様に会いに行くとは?—」 |
| | | 7月16日 | 源 健一郎先生「回向文—私のためはあなたのため、あなたのためは私のため—」 |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

橘 寺

(奈良県高市郡明日香村)

奈良の飛鳥は、自然に囲まれた緑豊かな場所です。飛鳥駅から自転車で20分ほどの距離に橘寺があります。車道から寺へ向かう小道の前には「聖徳皇太子御誕生所」と書かれた石柱と私たちを迎えるように佇んでいるお地蔵さまが目にとまります。石柱にあるように橘寺は聖徳太子生誕の地とされています。橘寺のすぐ前には栗の木があり、初夏にはその独特の甘い香りに心が落ち着くはず。境内に入らず目に入るのは、聖徳太子の愛馬「甲斐の黒駒」の像です。この馬は聖徳太子に大切にされ、太子を乗せて空を飛んで富士山まで往復したという伝説が残っています。また、二面石と呼ばれる飛鳥時代の石造物があり、右は善面、左は悪面と我々の心の持ち方を現しています。



橘寺が建立される以前、この地には、橘の宮という欽明天皇の別宮があったとされ、そこで聖徳太子が推古天皇の命により、三日にわたって勝鬘経を講義したと言われています。ご本尊の「木彫聖徳太子勝鬘経講讃像」は、その講義のお姿を表現したもので、飛鳥にある29件の重要文化財の一つです。勝鬘経とは、勝鬘夫人の悟りを説いた経典で、聖徳太子

は自ら法華経・維摩経・勝鬘経に注釈を加えられました。これを「三経義疏」といい、勝鬘経義疏はそのうちの一つです。



さまざまな伝説を残された聖徳太子ですが、勝鬘経の講義の時にも不思議な出来事が起こったとされています。講義の最中、蓮の花びらが庭にたくさん降り積もり、南の山に千の仏頭が現れて光明を放ち、太子の冠から日、月、星の光が輝きました。これに驚かれた天皇が、この地に寺を建てよう太子にお命じになったのが橘寺だと言われています。

飛鳥には寺院のほかにも古墳が多くあります。ここでは天武天皇と持統天皇とが合葬された古墳を紹介します。天武天皇は673年に第40代天皇として即位、中央集権国家の確立に力を尽くした後、686年に崩御しました。その後、天武天皇の遺志を継ぎ、690年に第41代天皇として即位したのが天武天皇の皇后であった持統天皇です。二人は非常に仲が良いご夫婦だったので、持統天皇が亡くなったのちに二人共に火葬され、遺骨は一つのお墓に収められました。二人の天皇が同じお墓に葬られている例は珍しいため、飛鳥を訪れた時には見ていただきたい古墳の一つです。飛鳥に赴くとその時代の風景が目にとくんでくることでしょう。

(ウパーヤ学生編集員：田村美咲・松浦華子)

仏教のことば

波羅蜜

よくお経の中に見かける仏教要語として、「波羅蜜」という言葉があります。この波羅蜜は、サンスクリット語の Pāramitā [パーラミター] を音写して造られた漢訳語です。本来は波羅蜜多と書かれますが、多という文字がさらに省略されて、「波羅蜜」という言葉ができました。さて、この言葉は Pāram [パーラム] という語と、itā [イター] という語が、合成してできた複合語です。Pāram とは対象や

目標を意味します。itā とは、そこに到ること、つまり達成とか到達と言った意味です。従って、「波羅蜜」という言葉は、簡潔に言うと、達成目標であるとか、その目標の所へ到達することを意味しています。唐の時代に活躍した有名な玄奘三蔵は、この言葉を「到彼岸」(彼岸に到ること)と翻訳しました。彼岸とは、我々が目標とすべき悟りの世界であり、その悟りの世界に到達することが「波羅蜜」だと玄奘三蔵は仰っている訳です。大乘仏教では、菩薩が実践すべき六つの達成目標ををかけております。これを六波羅蜜行と言います。これには、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つがあげられますが、このように一つ一つの目標を掲げて、その目標を確実に達成し、その徳目を完成させていくことが、大乘仏教の特色でもあるわけです。

(藤谷 厚生)

編集後記

本号では曾野先生や源先生から、他者との関わりの中で自己自身と真摯に向き合いつつ生活しようとする仏教的な生き方への導きとなるお話をさせていただきました。

また、野口先生による御住職である野中寺に関するお話、また、学生編集員の田村さん、松浦さんによる橘寺に関する取材報告は、聖徳太子の偉業について改めて気付けられるものでした。

卒業生インタビューでは、坂田さんから学生時代の仏教の学びを通じた出会いや経験が職場での充実した生活につながっているとお話を伺うことができました。

皆さんも本誌を通じて仏教の一端に触れることで、自身の生き方を見つめるきっかけにいただければ幸いです。

(H.U)

研究所員紹介

所 長 西岡 祖秀(学長・教授)

主任研究員 矢野野 隆男(教授)

研究員 上 續 宏道(教授)

兼子 恵順(教授)

藤谷 厚生(教授)

源 健一郎(教授)

桃尾 幸順(講師)

南谷 恵敬(客員教授)

UPĀYA (ウパーヤ) 7号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成27年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611

URL: <http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

E-mail bukken@shitennoji.ac.jp

(件名は「ウパーヤ」としてください)

